

【氏名】王 恩美

【所属大学院】（助成決定時） 一橋大学言語社会研究科

【研究題目】

韓国・中華民国の分裂国家のはざままで生きる韓国華僑
—韓国華僑の歴史とアイデンティティ

【研究の目的】

1949年、中華人民共和国が樹立し、事実上、「中国」には二つの政府が存在することになったが、韓国華僑は、専ら中華民国を「祖国」として認識していた。韓国華僑社会においては、中華人民共和国を支持する勢力は存在せず、中華民国を支持する勢力のみが存在してきた。しかし、韓国華僑は、99%が中国大陸（そのうち90%以上は山東省）出身である。中国大陸が故郷であるにも関わらず、現在は台湾に政府をおいている中華民国の国籍を所持し、専ら中華民国を「愛し」続け、中華民国を「祖国」として認識してきたのである。

本研究では、第二次世界大戦後、韓国華僑が中華民国を「祖国」として認識するように至った歴史的過程を明らかにすることを目的とする。

【研究の内容・方法】

韓国華僑の「祖国」意識の形成過程を考える際に、最も重要なキーワードになるのが東アジアにおける冷戦体制である。韓国華僑の「祖国」意識を明らかにするためには、華僑社会を取り巻く外部環境を明らかにする必要がある。韓国華僑の「祖国」意識の形成過程は、冷戦体制における韓国・中華民国・中華人民共和国という国家間の関係と関連付けて考えねばならない。つまり、東アジア現代史というより大きな枠組みでその問題を捉える必要があるのである。

筆者は、韓国華僑がこうした「祖国」意識を形成したのは、東アジアの冷戦体制下で反共陣営の韓国・中華民国に挟まれた結果であると考えている。主に四つの要因が考えられる。第一に東アジアの冷戦体制の形成と朝鮮戦争、第二に韓国のナショナリズムに基づいた排他的な法制度、第三に中華民国の対韓国華僑政策、第四に韓国と中華民国の反共体制と両国の国家関係である。

本研究の第一章では、主に先行研究を中心に、朝鮮半島への移住から1945年までの華僑の歴史をまとめ、朝鮮華僑は「中国人」意識を形成していたことを考察した。第二章では、東アジアの冷戦体制の形成と朝鮮戦争により、韓国華僑は反共陣営に属する中華民国への帰属意識を自覚し、「中国人」意識より優先される国家への帰属意識が形成されたことを考察した。第三章では、韓国政府の排他的法制度により、韓国華僑は中華民国の国民として、直接自分に届く国家の援助を期待するようになり、それが「祖国」意識の強化につながっ

たことを考察した。第四章では、中華民国の対韓国華僑政策は、韓国華僑社会を建設し、安定化を図るための求心力となったことを考察した。第五章では、朝鮮戦争後に確立した韓国華僑の反共意識は、韓国と中華民国の反共体制の影響を受け、反共主義が価値判断基準として働き、反共主義が正しいと認識する価値観を形成したことを考察した。第六章では、韓国華僑が想像する「祖国」たる中華民国は「中国全土を領土とする中華民国」であり、2000年台湾総統選挙を契機に韓国華僑の「祖国」意識が崩壊するようになったことを考察した。

【結論・考察】

1945年に形成された朝鮮半島の分断、1949年に形成された中国の分裂は、韓国華僑の「祖国」意識形成の土台となった。その後、1950年に勃発した朝鮮戦争によって、その「祖国」意識はより強化された。その後、韓国と中華民国が反共共同体を形成したこと及び、韓国政府の差別的な法制度、中華民国政府の華僑政策は、その「祖国」意識を一層強固なものにした。つまり、韓国華僑の「祖国」意識は、段階的に徐々に強化されて形成されたのであり、一つの歴史時点に突然と生まれたものではない。

韓国では韓国華僑が中華民国を「祖国」として選択せざるをえない構造が形成されていた。中華人民共和国との接触を完全に遮断し、共産党を「敵」として認識する韓国において中華人民共和国という選択肢は、そもそも与えられなかったからである。

韓国華僑が「愛してきた中華民国」は「中国全土を含む中華民国」であった。こうした「幻の中華民国」を「国民党政権」と同一視することと、国家体制として「中国全土を含む中華民国」が維持されていたことが韓国華僑の「祖国」意識を支えていた。したがって、韓国華僑の「幻想」と「現実」という二重構造を形成していたと言える。